

白川わくわくランド ニュース

第31号

発行

●白川流域住民交流センター
(白川わくわくランド)
〒860-0854
熊本市東子飼町8-55
TEL (096) 346-5454
FAX (096) 346-5411
ホームページアドレス
<http://www.wakuwaku-land.com>
メールアドレス
wakuwaku@wakuwaku-land.com

地元の井手を蘇らせた い

土手を整備し井手底のごみを拾い カワニナ・シジミ・ザリガニ確認

十月二十八日の日曜日午前九時から、本荘校区二町内で、三の井手の清掃がありました。参加者は、中学校一年生から大人まで一〇名。うれしかったのは、中学生・高校生三名の参加があったこと。秋の熊本市一斉清掃の一環で行われましたが、ここには、住民の方々の熱い思いがありました。農業用水として造られた三の井手は、冬場は水が流れず、夏場にせっかく命を得た川の生き物も死に絶えてしまっていたそうです。その上、水の無い井手は、心ない人のごみ捨て場となり井手底には目をそむけたいくらいに廃物が捨てられておりました。そのゴミを拾い出したのです。空き缶・空きビン・ビデオテープ・割れた瀬戸物・ビール類等、十m程の区間の井手からゴミ袋八袋も拾い出しました。今年六月三日の春の一斉清掃では、二十名の参加で井手沿いの雑草や楠・榎の手入れをしました。そして、冬場も三の井手に少しずつ水を流してもらおうようになったそうです。

きれいになった井手では、たくさんの方が発見できました。ホタルの幼虫の餌になるカワニナ・シジミ・オイカワの稚魚・ザリガニ・上流から流れて根付いたオオカナダモ……。住民の方の努力で、いつの日かここにホタルが飛んだらどんなに素敵でしょう。「地域の環境を地域の住民が守っていく」そのきっかけになることを信じています。



春の一斉清掃、井手沿いの手入れ



清掃後捕れたザリガニ



子供たちが井手に入り清掃活動

平成19年度寺子屋案内

★クリスマス・新春クラフト★ ★白川河川敷で遊ぼう★

マツボックリのツリーと
お正月の竹箸作り!

12月8日(土) 10:00~12:00
対象 小学生以上
募集人数 20名
参加費 100円

たこを作って河川敷で
あげてみよう!

1月19日(土) 10:00~12:00
対象 小学生以上
募集人数 20名
参加費 100円

★バードウォッチング★

子飼橋周辺で野鳥観察をしよう!

2月16日(土) 10:00~12:00
対象 小学生以上
募集人数 20名
参加費 100円

★白川中流域 「大津の自然と歴史」★

～上井手堰から
上井手をたどる～

3月22日(土) 9:00~16:00
対象 高校生以上
募集人数 30名
参加費 1,200円(予定)

★お申し込み・お問い合わせ★

白川わくわくランド

TEL 096-346-5454

FAX 096-346-5411

<http://www.wakuwaku-land.com>
E-メール wakuwaku@wakuwaku-land.com

白川の橋(27)

吉原橋

河口から数えて27番目の橋。県道231に架かり路線は託麻北部線。右岸が龍田町弓削、左岸は橋を境に吉原町と中江町である。橋長は117m。橋柱に昭和29年10月架設とある。昭和28年の白川大水害で流失後架かったのだろう。昭和58年、上流側に歩道が設置された。橋には「よしはらはし」と書かれていた。



白川右岸橋下流より見る

寺子屋 わくわく講座

白川の水辺空間から「白川そだち」をもとめて

川の風景は人を育むか？



日時 平成十九年十月四日(木) 十九時～二十一時
講師 熊本大学自然科学研究科 教授 風景デザイン研究会 会長 小林 一郎 先生
場所 白川わくわくランド
参加者 二十名

① 私の少年時代

今から三、四十年前までは、ごく日常的な生活や遊びの中に川や山があり、そんな生活を通して体で安全を確認した。洪水・台風などへの備えも周りの大人が備えをしながら教えてくれた。

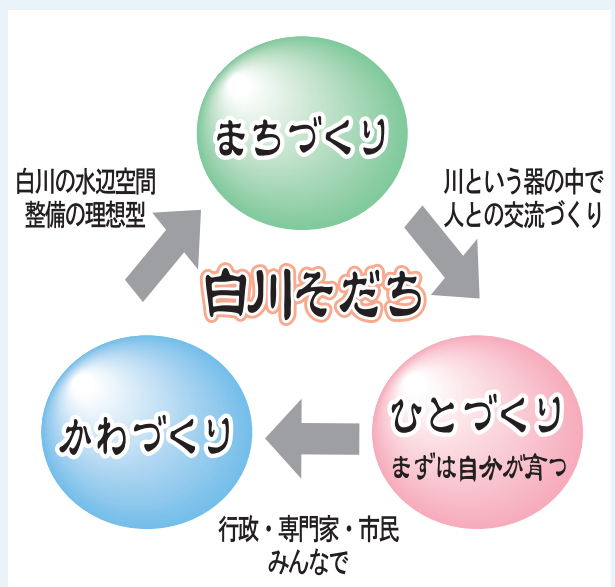
② 椅子は凶器か？

「椅子で人を殴ったことのでその社会から椅子が一扫された」話を例えに出して、「川は危険か？」と問われた。

川の危険でない使い方方をどうしていくかが大切と。

③ イベントから社交へ

川を使つての単発的なイベントをするだけでなく、川沿いを散歩したり眺めたり犬の散歩をしたりする仲間が挨拶したり情報交換をしたりなど、川を日常的に「お付き合いの場」として広げていくことが大切。



④ 川という器の価値

川は単なる排水路か？そうではないはず。川自体が人を育てる働きがある。遠い川(距離ではなく気持ち)にしないこと。

⑤ 器の使い方：白川全体をどう考えるか

白川全体(小碓橋から河口まで)を見通したメリハリのある水辺空間整備計画が必要である。白川の特徴を考慮して、小碓橋から河口まで五つのゾーンづくりをする。

この整備にあたって次のことに留意する。

- イ、各ゾーンの特徴にあった計画
- ロ、隣り合うゾーンとの調和
- ハ、地域の意見の反映
- ニ、どこからみても良好な景観
- ホ、水辺の緑を守りさらに増やす
- ヘ、川がよく見え水辺に近づけること
- ト、まちづくりと一体となった空間

白川の水辺空間計画 (国土交通省)



図 2-1 ゾーニングの様子

叱られて、山を見上げたことはありませんか？
喧嘩して、川に出かけたことはありませんか？

水の音、樹の香り、そよぐ風
全てが子供たちを育てるのです。

風景は、人の心をいやします。

白川を、そんな川にしたい。
そのために何をすべきか話し合しましょう。

(熊本大学作成 わくわく講座案内状より)

白川わくわくランド寺子屋

普賢岳噴火とその後

一七九二年・一九九一年の災害から学ぶ

日時 平成十九年十月二十七日(土)
 七時四十五分〜十七時

講師 熊本地学会員 村上 能治 先生

場所 長崎県島原市

参加者 二十七名

「災害は忘れた頃にやってくる」は、防災の研究を行った物理学者 寺田寅彦 の言葉とされています。

いいことも悪いことも月日が経つと人々の脳裏から遠ざかっていくことが多いものです。特に災害は当時は「決して忘れない」と思っているのも、復興が進み歳月が過ぎていくと忘れ去ることも多いものです。そして、人々がその怖さを忘れた頃、また災害が発生するのです。でも、最近では忘れる間もなく天変地異が起こっています。

寺田寅彦は、随筆「天災と国防」のなかで、「悪い年回りはむしろいつかは回って来るのが自然の鉄則であると覚悟を定めて、良い年回りの間に十分の用意をしておかなければならない……」と書いています。

今回のわくわくランド寺子屋は、災害とその復興を中心に、島原で学習を行いました。

島原港に着くと間もなく眉山がそびえています。寛政年間、普賢岳噴火とそれに伴う地震、そして眉山崩壊による津波等の災害を引き起こした眉山の山腹は当時の災害を想像させるに難くありません。「島原大変、肥後迷惑」と語り継がれた災害でした。それから二百年後、また、大規模な噴火とその後の土石流等が地元の人々を苦しめています。

復興は着実に進んでいます。「災害はわすれたころに」にならないことを祈ります。



写真1

超遠隔操作の様子。超遠隔とは150m以上離れた場所を指すのである。

1991(平成3)年大火砕流を起こした雲に隠れている普賢岳新山が後方に見える。その噴火による災害復興工事が火山砂防事業として行われている。土石流による警戒区域内での工事ということで無線による遠隔操作重機を用いての工事である。左に見える建物の中で、数十台のモニター画面が工事現場を映し出し、その画面を見ながら写真1のように常時10名ほどの人が重機捜査を行っている。作業現場には一人一人いない。

もし、タイムスリップすることができるなら、寛政年間に土石流と闘った人々は、この光景をどんな想いで見るだろうか。



大野木場砂防みらい館展望所から見た普賢岳。火砕流の堆積物や土石流を防止する砂防施設も見ることができる。

この顔もまたいつかその形相を変える日が来るだろう。

外観を残してすべて焼き尽くされた大野木場小学校跡。校庭のぶらんこなどの遊具にも火砕流の爪痕を見ることができる。



自然の営みは、災害とともにまた人間への恵みももたらす。市内のいたるところに湧水があるが、日本名水百選に選ばれた島原湧水群の一つ浜の川湧水を訪れた。

ここでは、洗いものによって洗い場を4つに区切りそのルールに従って地域の人が利用している。ちょうど洗濯場で帽子を洗っておられた。水の恵みに感謝し、それを大切に使うという地域の人々の心がみえる。



海の向こうにかすむ金峰山。遠くこの海を越えた津波は肥後の国の5000の人の命を奪った。